

2020.2.15 南山大学

アイヌの埋葬頭位と他界

瀬川拓郎（札幌大学）

1 藤本英夫の埋葬頭位論（藤本 1964・1971 ほか）

1) アイヌの埋葬頭位と他界

- ・埋葬頭位は冬至点と夏至点のあいだに集中（東頭位）。
- ・死者の霊が立ち上がったとき、西方の地下にある死の国に向かっていくため。
「アイヌの死者の国は、下方の国（ポクナ・モシリ）とって陽の落ちる西の方にある。それで死んだ人が立ち上がったとき、まっすぐ西の方に向いて歩いていけるように、顔を上に向け、頭を東にして埋葬する」（鷲塚鷲太郎翁）。

2) 北海道における埋葬頭位の変遷

- ・北海道には時代を越えて存在する二つの地域集団（道南・道東北）があるとし、「北海道土着集団」である道東北に一貫して東頭位が存在してきたと理解。
- ・道南——縄文時代から続縄文時代にかけて西頭位（本州の西頭位の影響下にある人びと。ただし続縄文時代以降の頭位は不明）。
- ・道東北——縄文時代から続縄文時代にかけて東頭位（北海道土着文化の集団。8世紀に本州文化を受け入れ、かれらが擦文文化を形成。以後、擦文文化期からアイヌ文化期には東頭位となる）。

※擦文文化成立期には、北海道東部の続縄文集団はオホーツク海沿岸を南下するオホーツク人を避けて西南部に居住している。擦文文化集団の出自を東部の集団に限定することは可能なのか（瀬川註）。

2 林謙作による批判（林 1977）

1) 単一頭位論は成立するのか

- ・夏至点から冬至点のあいだに頭位が集中するのは事実だが、それらはいくつかのクラスター（複方向）にまとめることが可能。
- ・関東以北の縄文時代遺跡でも、頭位はつねに複方向（主方向に対し 90 度ズレ + 主方向に対し 180 度ズレ）。一方向に限定できない。

2) 頭位 = 西方他界への疑問

- ・アイヌの他界は、一定方位と結びついていたとは考えにくく、西方他界は和人からの影響か。
- ・アイヌの他界は、死者の魂が洞窟を通り抜けた先にある、現世と同様な世界（ポクナ・モシリ）と思念されている。その先に、アイヌが祖霊（シンリツ）と呼ぶ存在の世界があるのかもしれないが、実態は明らかではない。

3) 頭位と他界の入口

- ・死者の魂が向かうのが現実に存在する洞窟であるとすれば、頭位は墓地と洞窟を結ぶ軸上に設定されていたと考えるべきであり、ひとつの墓地の頭位が複方向であるのは、死者の向かうべき洞窟が出自によって異なっていた可能性を示す。

3 林説の検証——中近世・近代アイヌ墓集成から（宇田川 2007）

1) 林説は成立するか

- ・他界の入口としての洞窟（アフルパロ）は内陸にも存在するが、多くは海蝕洞窟。したがって洞窟と頭位の関係を説く林の議論を踏まえれば、各地の埋葬頭位はおおむね海と遺跡を結ぶ軸上に来るものが多数を占めるはず。

2) 予想される各地の頭位

- ・胆振 南—北
- ・日高 南西—北東
- ・石狩低地帯 南—北
- ・後志 南—北
- ・渡島 西—東
- ・十勝 南東—北西
- ・釧路 南東—北西
- ・網走 南西—北東

3) 他界の入口である海蝕洞窟と頭位

- ・各地の頭位は、遺跡と海を結ぶ軸上に一致するものもあれば、そうでないものもある。全体として、海蝕洞窟と頭位の関係は考えにくい。

4 中近世アイヌ墓の頭位

- ・アイヌの他界を高山山頂に措定する見解もあるが、各地の頭位は高山山頂と対応するものにもみえない。
- ・各地の頭位は、藤本が指摘したように東を中心として南北に幅を持つ（48例すべてが北頭位の浦幌町は明治時代以降の墓址、12例が西北西の根室市も明治時代以降の墓を含む）。中近世アイヌ社会全体として、東頭位への指向性が認められる。

追記

縄文時代後期後葉の周堤墓が集中する千歳市キウス周堤墓群では、東に1.5 km離れた標高120mの馬追丘陵山頂部から長さ1m弱の北海道最大の石棒が出土。藤原秀樹は、「キウス周堤墓群から見て太陽が昇る方角にあたる見上げるような地点にも（キウス周堤墓群を構築した集団の）儀礼

の場が存在した」とする（藤原 2019）。この儀礼の場が、日の出方向あるいは山頂に措定されていた他界とかかわるものだった可能性は考えられる。ただし、周堤墓の墓壙は長軸をおおむね南東―北西にもち、墓標は壙口の北西側に設置されることから、頭位は北西と推定される。

文 献

宇田川洋 2007『アイヌ葬送墓集成図』北海道出版企画センター

林 謙作 1977「御殿山墳墓群ノ埋葬頭位ヲ論シ併セテあいぬ族ノ他界観ニ及フ」『北方文化研究』

11

藤原秀樹 2019「周堤墓と葬送儀礼」『季刊考古学』148

藤本英夫 1964『アイヌの墓』日経新書

藤本英夫 1971『北の墓』学生社